奨励

ペイン・ゼロではなく

奨励	深田 未来生〔ふかだ・みきお〕
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

わたしの嘆きはつのり
わたしの心は弱り果てる。
見よ、遠い地から娘なるわが民の
　叫ぶ声がする。
「主はシオンにおられないのか
シオンの王はそこにおられないのか。」
なぜ、彼らは偶像によって
異教の空しいものによって
　わたしを怒らせるのか。

刈り入れの時は過ぎ、夏は終わった。
しかし、我々は救われなかった。
娘なるわが民の破滅のゆえに
わたしは打ち砕かれ、嘆き、恐怖に襲われる。
ギレアドに乳香（※）がないというのか

そこには医者がいないのか。
なぜ、娘なるわが民の傷はいえないのか。

（エレミヤ書　8章18―22節）

痛みと人間

ペイン・ゼロの広告を『羅府新報』という歴史あるロサンジェルスの日本語新聞で見かけたのはいつのことだったろう。他の広告同様、目に入ったけれども、内容も読まずに新聞記事に目を移したように思い出す。再びペイン・ゼロが関心の的になったのは腰痛の悩みを聞いた友人が１個送ってくださったからである。においをかいでみると、少年時代に我が家にもあったサロメチールのようでありながら違い、触ってみるとあまりベトベトしない。１、２回使ってみるとよく効く。くださった方も伝道者っぽく、熱をこめてその効果を語る。その熱情を受け継いだのが姉で、こっちは伝道者のごとく、ことあるごとに、まるで製造会社の代理人の調子でペイン・ゼロなるあまり聞いたことが少ない軟膏の話をするのである。したがって、ここ数年ペイン・ゼロは発祥地ロサンジェルスから海を越えて京都、長野県、当然東京へと名が知られて愛用されるにいたっているのである。だれもこの商品で儲かったとは言わないけれども、いろいろなコメントが交差し、大いに助かっている人が多くなっていると聞く。大体はいろいろな治療を試みて体の痛みを取り除こうとした人が治療効果が上がらないため、まあ人に聞いたこのペイン・ゼロなるものを試してみるかといった、一種の「最後の望み」を託すようにして試してみるらしい。

このペイン・ゼロなるちょっといかがわしい薬に限ったことではない。３月半ば、朝日新聞で見かけた広告の見出しは「痛いことが、普通になっていませんか」で、いろいろな痛みを列記していた。これは漢方の飲み薬の宣伝であるが読者の関心を引くものであった。このような痛み止めの宣伝はさまざまなところに見いだすことができる。

聖書のなかでは

聖書のなかには、旧約聖書から始まって、病を患い、痛みに苦しむ人間の姿が現れてくる。病と痛みは人間の宿命であるように考えられていたのだろう。出エジプト記（23章25節）には十戒から始まって長く続く律法の言葉のなかに「あなたたちは、あなたたちの神、主に仕えねばならない。主はあなたのパンと水を祝福するであろう。わたしはあなたの中から病を取り除く。」とある。パンと水は欠かすことのできない生命の糧。それに対して病はその生命を脅かすもの、脅威として人びとが恐れていたことが分かる。申命記の言葉もそれを裏付ける。（７章15節）「主はあらゆる病気からあなたを守り、あなたの知っているエジプトのあらゆる重い病気にかからせず、あなたを憎むすべての者にこれを下す」。

エジプトに囚われの身となって苦しんでいたイスラエルの民は過酷な労働と同じく彼らを襲う病気を恐れて苦しんでいた。さらに、ここでは病気は神が用いられる武器のごとくに表現されている。決して分かりやすい箇所ではないのだが。

病気はひたすら避けたい、遠ざけたい、排除したい苦しみであった。時にはそれが神からの罰であるが如くに受け止められていたのかもしれない。病人にはあまり近寄りたくない、病んでいる人、痛みに苦しんでいる人は穢（けが）れた存在であるがごとくに見られていたこともあった。神が与えられたと信じる律法に逆らい、罪を犯した人間が自らの上に招いた結果とも考えられていた。預言者ヨブなどはこのような不条理な苦しみや痛みについての考え方に疑問を抱き、抵抗を示している。（16章）そして健康を回復することは神の力の表現だとしていたのだ。

聖書のなかの考え方に変化が起こってくるのは預言者の時代である。イザヤがその変化の代表である。彼が描く主の僕、救い主の姿はほとんど痛々しい。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている」（イザヤ書53章３節）。読み方によっては痛みを体験し、病気を担ったからこそ、人の痛みに共感し、病の苦しみにこたえることができる、人が癒しと解放をもたらすことができるといっていると見ることができる。身を挺して苦しむ人に近づいてゆく姿である。私たちはこれを「苦難の僕」と呼んでいる。

新約聖書の福音書に現れてくるイエスはまさにそのような人であった。人びとが、そして社会が避けようとする、近づかないようにする病気や痛みの現実は、イエスにとって手を差し伸べる優先事項であった。近づくだけでなく触れられたのである。そして病む人もイエスに近づき、衣でもよいからイエスに触れたいと願ったのである。（ルカによる福音書８章42節より）世の中が、律法が穢れたものと考えた病気と病人である。イエスは病人に触れられただけではない。遺体にすら触れられたのである。（ナイン村のやもめ　ルカによる福音書７章11節より）神の慈愛と癒しの力への信頼をもって。

マタイはイエスの伝道を簡潔にまとめて記す。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイによる福音書９章35節）。８章の重い皮膚病を患う男との出会いのシーンも心を打つ。男はイエスに近づいてひれ伏す。「イエスが手を差し伸べて、その人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。」（８章３節）という出来事が記されている。

痛みは肉体だけではなく

肉体の病だけではない。10章１節の汚れた霊を追い出す権能を弟子たちにお与えになったというのは、私たちの社会を痛めつけ、世界が神の御心に反して病んでいることに対する挑戦の姿勢をさしている。人間が力や財力を持つ人びとによって周辺に押しやられて痛み、悩み、苦しんでいる状況の真っ只中に歩みこむのがイエスの姿であり、近寄ってその人たちや状況に直接触れるのが弟子たちに与えられている使命だったのである。

私たちが直面し、体験する病や苦痛は肉体的なものだけではないが、人間は病気になると、当然ながら極端に自己中心になる。痛いと顔がゆがむが、ゆがみは顔だけでなく、当人がそうありたくないと思っても気持ちや心構えもゆがむことがある。物事が正確に、的確に捉えられない、考えられない、決断力が鈍る。良い医者はそのことを良く分かっていて、心も含めて人間の存在全体を見て対応する。私は、イエスは深い意味でそのような医者に似た存在だったと思う。自分の病気と痛みにがんじがらめになっている人に近寄る、触れる、語りかける。そしてその人が自分の病気を自ら背負えるように解放する。心をほぐすといってもよかろう。人間に神から与えられている癒しにつながる力が作動できるようにする。時には肉体は滅びてもその人は神に生命を与えられて生きたものとして勝利するといってもよい。

癒しを求める叫び

病や痛みは肉体に限ったものではないといった。社会も病み、痛み、苦しむ。

肉体の痛みのみならず社会的存在として痛めつけられ、苦難と苦闘の長い歴史を強いられたアメリカ黒人の生み出した歌にはその痛みがにじみ出る。黒人霊歌として知られながら日本語にはなりにくかったのがThere Is a Balm in Gileadである。去年、偶然これが日本ルーテル教会の１９７４年版に含まれていることを知った。ギレアドとは今日読んだエレミヤ書に出てくるヨルダン川東岸に広がる泉が多く森林が広がる豊かな地域であり、乳香でも知られていた。乳香は高い木から取れる香りの良い液体に香料を混ぜ、薬として貴重なものであった。東方からの学者たちが赤ん坊イエスのところに持ってきた三つの贈り物の一つとして福音書は記している。

エレミヤ書に見いだすエレミヤは絶望に近いなかにいる。選ばれて責任と可能性を与えられているイスラエルの民がその神を裏切り続けている。偽預言者たちの扇動に簡単に乗る。「自分には為すすべがない」。うめき、痛みきったエレミヤがうずくまるようにしながら「癒し」を求める叫びを発する。しかしその叫びにはほとんど半信半疑といった響きがあるように私には思える。

「なぜわが民の傷はいえないのか」。「ギレアドに乳香がないというのか。そこに医者がいないのか」。これがエレミヤの叫びである。

傷が癒される

奴隷生活を強いられていた黒人たちもエレミヤ同然、絶望のなかにあった。彼らは抑圧者から教えられたキリストへの信仰にしがみつくようにしながら、語られる神の働きを聞き信じようとした。彼らがエレミヤの姿を自らのものとして受け止めて歌ったとき、トーンは変わっていた。彼らにとってギレアドの乳香に象徴される神にある癒しは確実なものとして歌われる。There Is a Balm in Gilead.奴隷たちにとってギレアドに傷を癒す乳香はあるのかではなく、「確実にある」が答えであった。神の本質と働きを彼らはそう信じたのである。

ギレアドの乳香は傷を癒す、傷を癒すとあまり抑揚の多くないメロディに暗黒の生活を強いられていた黒人たちは心を注ぎ込んで歌ったのであった。きっと神は癒しの力として乳香をすべての人の心の奥底に与えていてくださると信じていたのだろう。

それだけでも日常的な過酷な生活に耐えてゆく力が沸いてきたに違いない。

肉体が衰えてゆく私たちが抱える病や痛み、私たちの世界に満ちる人びとの痛みのうめき、人が愛の関係を築けない悩みを乗り越える神からの乳香を私たちは信じて生きられるだろうか。

ペイン・ゼロではなく、ペインがあっても、それをどのように担い、それに対処するのか、特に心の痛みを、このチャレンジを避けずに祈りつつ生きたいと願う。

※乳香　Frankincense幕やのなかで焚かれる香の四つの材料の一つ。高価。死刑に処せられるものは処刑前にぶどう酒にこれを混ぜたものを与えられ、痛みを感じることがないよう配慮された。英語ではBalm。

2012年5月16日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録